新「地区社協」創造

～笑顔でつながり、未来を綾なす新しい地域～

「新『地区社協』創造」の発行にあたり

「構想」から「創造」へ

都城市における地域福祉の歩みを振り返るとき、平成 11 年は極めて重要な節目の年でありました。当時の関係者により「地区社協構想」が策定され、市内 15 地区すべてに「地区社会福祉協議会」が誕生しました。

以来、四半世紀。この「地区社協」という器（うつわ）は、住民の皆様の献身的な活動によって守り育てられ、向こう三軒両隣の精神を体現する、都城の地域福祉の揺るぎない土台となりました。

しかし今、私たちは大きな時代の転換点に立っています。

少子高齢化と人口減少は予測を超えて進み、共働き世帯の増加やライフスタイルの変化により、地域との関わり方も多様化しました。「役員のなり手が不足している」「固定メンバーへの負担が限界にきている」――。地域から聞こえてくる声は、決して後ろ向きな弱音ではなく、今の社会構造とこれまでの活動スタイルが合わなくなってきたことへの、正直な「声」であると私たちは受け止めています。

一方で、地域に目を凝らせば、新しい希望の芽も確実に育っています。

子ども食堂や多世代交流サロン、若者が教えるスマホ教室など、従来の計画にはなかった活動が、「誰かの役に立ちたい」「自分たちも楽しみたい」という住民の自発的な想いから次々と生まれています。

こうした現状を踏まえ、私たちは第５次地域福祉活動計画の策定に合わせ、これからの 10 年を見据えた新たな羅針盤として、令和６年度に「令和版地区社協構想プロジェクト」を設置し検討してきました。それを、**「新『地区社協』創造」**として提示します。

「笑顔が集まる居場所をつくる」「小さな困りごとを見逃さない」という目的のために、もっと自由に、もっと楽しく、そして無理のない仕組みへと、組織のあり方を進化させていく。それが本創造の核となるメッセージです。

誰もが役割を持ち、笑顔でつながり、未来を綾なす新しい地域を、私たち自身の手で、楽しみながら創造していこうではありませんか。

令和８年３月

社会福祉法人　都城市社会福祉協議会

会　長　　島 津　久 友

都城市地区社会福祉協議会連絡協議会

会　長　　石 田　　操

1 策定の背景と時代の変化

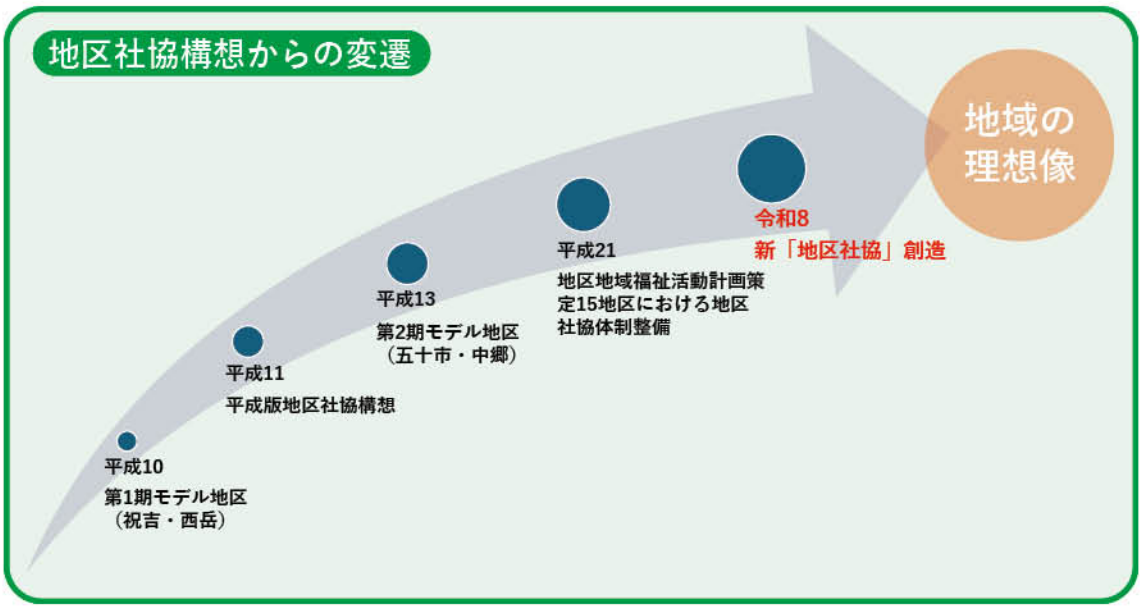
平成 10 年度よりスタートした第 1 期モデル地区社協（平成 10 ～ 12 年度／祝吉・西岳地区）の展開を踏まえた「地区社協構想」が平成 11 年 4 月に策定され、平成 21 年度には市内 15 地区における地区社協体制整備が進みました。

この構想は、第三次都城市総合計画後期実施計画に位置づけられた『地域福祉推進モデル事業』として、都城市と都城市社会福祉協議会が一体となり、地区ごとの福祉のコミュニティを再編する目的で“こうすれば住みやすい環境づくりができるのではないか”という提案であり、住民と共に進めていくべき地域福祉の指針となりました。具体的には、地区社協の組織体制、自治公民館圏域と中学校区の関係性、事業や活動、財源等について基本的な考え方を示したものです。

それから 25 年が経過し、少子高齢社会の進展や価値観の多様化により、コミュニティの概念が大きく変化する中で、従来の地域福祉推進組織や地域福祉活動の在り方も次の段階に移行する必要性がでてきました。

そこで、令和の時代における新たな地区社協の活動に向けて、地区社協関係者等による「令和版地区社協構想プロジェクト」を設置・検討し、今後の在り方を展望した**「新『地区社協』創造」**をまとめました。

この創造は、地区社協活動を進めていく中でのガイドとして、地域福祉活動計画策定に役立てたり、地域活動で迷った時の「止まり木」として、活動の意義を導いてくれるものになります。



2 地域の想い・新しい構造

これまでの活動を通して、地域の想いや現場から聞こえてくる“声”に耳を傾けると、これからの地区社協が進むべき「3つの転換点（パラダイムシフト）」が浮かび上がってきました。

①「義務」から「共感・笑顔」へ

「役員だからやらなければ」という義務感だけでは、もう人は動きません。「楽しいから参加する」「みんなの笑顔が見たい」という「幸福感（ウェルビーイング）」こそが、新しい担い手を引き寄せる最大の引力です。

②「自前主義」から「チーム戦（協働）」へ

地区社協だけですべての課題を解決しようとする「自前主義」には限界があります。学校、企業、ＮＰＯ、行政など、多様な主体と手をつなぎ、得意分野を活かし合う「チーム戦」へとシフトする必要があります。

③「精神論」から「持続可能な仕組み」へ

「想い」や「熱意」だけではなく、ＩＣＴ（デジタル技術）による省力化や、有償ボランティアによる活動対価の支払いなど、「無理なく続けられる仕組み」を取り入れることが、活動を持続させる鍵となります。

みんながつながる横一愛 — 横市地区

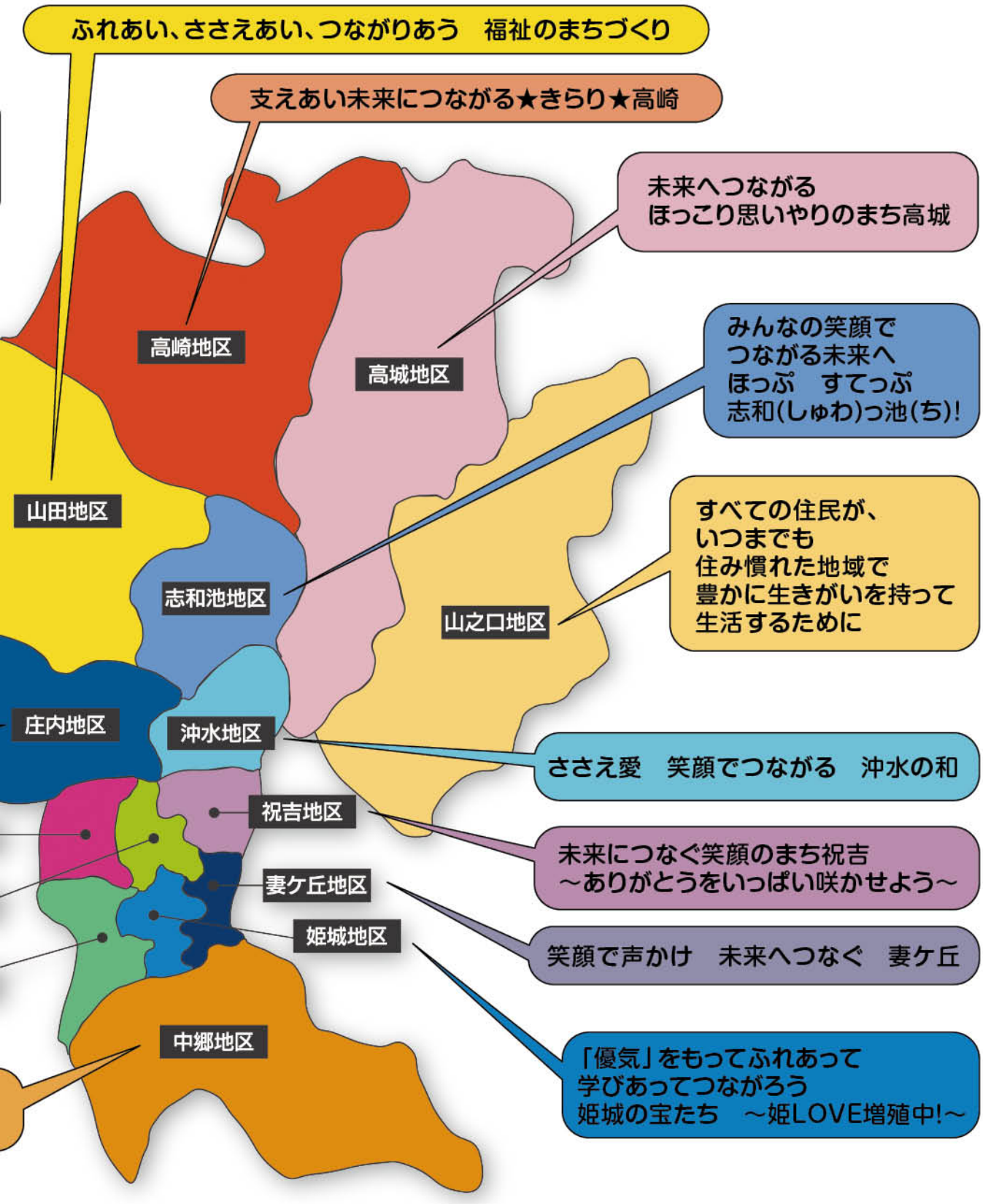
世代をこえて　笑顔でつながる　小松原 — 小松原地区

誰もが　まんなか　活気あふれる　いそいち — 五十市地区

みんな元気　笑顔あふれる　なかんごう
～こども・未来・絆～

この二次元コードから各地区の
活動計画をご覧いただけます

想いの詰まった15地区のスローガン



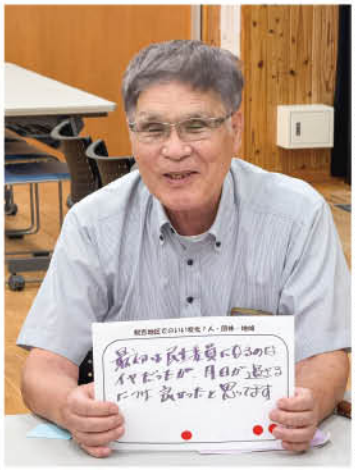
3 創造の道すじ ～笑顔と安心を生み出す「好循環」～

1．地区の全体スローガン：これから５年間の目指す地区全体の指針とは？

⇒第５回策定委員会（最終回）では、地区全体のスローガンを決めました。

2．行動指針：地域での活動や取り組みを導く大事な価値観とは？

⇒第１回～２回策定委員会では、「最もすごいチェンジ」を出し合いました



西岳2グループ

居（良い）場所（い～場所）
サロン
場所
集まり

タダ働き
は
サイコー!!

つながり
知り合い
仲間
人

うんめぇもん
なつかしいもの。おにしめ、ガネ
おいしい食物
愛あるものをたっぷりと
おいしい

エピソード
はるおさんげーにどんどん人が増えて来て地区の方々の集まりに話がはずみスタッフもやりがいを覚えた。楽しいです。

いい気分
楽しい知り合い
作る人が楽しい
楽しそう
買い物にくる人が楽しい
楽しい・楽しみ
お客のうれしそうな顔みるのが楽しい
喜び

タダ働き
なつかしい物
ボランティア
無償の提供
ボランティア精神旺盛の方の集まりである
目的が儲けじゃない
役に立っている実感がある
地域の活性化からはじまる

腹にためない
おしゃべり話し ➡ 笑い笑顔 ➡ 元気

やりがい
使命感
自分が役に立つ
自分で作る喜び！
やりがい

◆第５次都城市地域福祉活動計画「〇〇〇地区地域福祉活動計画シート」（抜粋）

地区全体スローガン	行動指針	活動・事業	課題・願望
「優気」をもって ふれあって 学びあって つながろう 姫城の宝たち 姫ＬＯＶＥ 増殖中	いろいろな団体と 地域がテーマで つながり、地域貢献 や災害時において 助け合える 関係を築いていこう	**地域福祉施設意見交換会** ・地区内の福祉施設、学校関係者、自治公民館長、民生委員・児童委員などと意見交換会を実施し姫城地区をより良くするための協議を実施	▲**課題** 実施回数が少ないため、継続した議論がしづらい。 ●**願望** 一回きりにならないように定期開催を検討していきたい。

第５次地域福祉活動計画を策定するにあたり、全１５地区で現状の「課題・願望」と未来への「想い」をシートに書き出しました。そこには現場のリアルな熱い想いが詰まっています。

これまでの活動を整理し、未来へ向かってどう進んでいくか、「その道すじ（ロジック）」を解説します。

３．実現に向けて必要なこと：その価値観を大事に、実現に向けて必要なことは？

⇒第３回～４回策定委員会では、「これから取り組むこと」「何が整えば実現できるか」を話し合いました。

【入り口（楽しさ・共感）：人が集まる】
多世代・笑顔・わくわく・サロン・顔見知りを増やす・参加へのハードルを下げる

↓　ここから信頼が生まれる　↓

【深まり（信頼・支え合い）：相談できる】
ちょっとした困りごと・キャッチ・見守り・楽しい場でできた関係性から

↓　これが安心をつくる　↓

【土　台（持続可能な仕組み）：無理なく続ける】
拠点・ＩＴ・自主財源

新「地区社協」創造への道すじ

実現に向けて必要なこと		目指す地区社協像
これから取り組むこと	何が整えば実現できるか	
○防災をテーマにした継続的な話し合い 要支援者の避難行動計画や避難先の安全確保について話し合う。障がいのある方への防災支援について学ぶ。 ⇒災害時に助け合える関係づくりにつなげる。 **○施設・民生委員・住民の連携強化** 互いの活動を理解し、協力し合える関係を築く。 ⇒一過性で終わらない連携体制をつくる。 **○次世代とともに進める地域防災の取組** 中学生をはじめとした若い世代の参画を進め、防災活動を通して人材を育成する。 ⇒世代を超えて支え合える、災害に強い地域づくりにつなげる。	**①【組織体制】誰が？** ・地区社協、福祉施設、自治公民館長、民生委員、若い世代 **②【財源】お金はどこから？** ・地区社協 **③【事務局機能】どのように？** ・車椅子や杖利用者の動線を体験し地域の設備や危険箇所を把握する。 ・意見交換会と訓練を年間サイクルで実施し、課題や現状を共有する。 ・地図を使ってエリアごとの課題を確認し、防災・介護・障がいなどテーマ別に継続的に取り組む。 **④【拠点】どこで？** ・福祉センター、必要に応じて施設を拠点	※これ以降を参照

4 3つの行動原則（活動の道しるべ）

～15地区の想いを束ねる、私たちの「共通言語」～

地区によって、人口も課題も活動内容も違います。しかし、目指している「未来の景色」は共通しています。手段は違っても、目的（どうありたいか）は同じ。ここでは、15地区すべての活動の道しるべとなる、3つの「行動原則」を掲げます。

【原則1】「ゴール」目指す姿

笑顔が集まる、誰もが主役になれる居場所をつくる

～「やらされる」から「やりたい」へ～

私たちの最終的な目標（ゴール）は、事業を実施することだけではなく、そこに集う人々の「ウェルビーイング（幸福）」です。

- 主役は「住民一人ひとり」
  「支援する人・される人」という固定的な関係を超えましょう。高齢者が子どもに昔遊びを教えたり、若者が高齢者にスマホを教えたり、誰もが「出番」と「役割」を持てる場所をつくります。
- 笑顔のバトンを未来へ
  「役員だから仕方なく」という義務感ではなく、「楽しいから参加する」という気持ちを大切にします。

＜活動例＞
多世代交流サロン、子ども食堂、eスポーツ大会、文化祭、マルシェ、お茶の間トーク

【原則２】「エンジン」推進力

多様な力とつながり、広がる共感で地域を動かす

～「楽しさ」と「連携」を原動力に～

ゴールに向かうためのエンジン（動力）は、「楽しさ」と「つながり」です。地区社協単独のエンジンだけでは充分ではありません。

- 「楽しさ」を入り口にする
  福祉の入り口は、常に開かれています。いきなり重い課題に向き合うのではなく、まずは「楽しそう」「おいしそう」というワクワク感で人を巻き込みます。
- チーム戦でパワーアップ
  学校、企業、ＮＰＯ、行政。地域にある多様な資源と手をつなぎます。外からの新しい風を取り込み、地域を動かすエンジンの力へと変えていきます。

＜活動例＞

学校・企業との連携協定、防災キャンプ、コラボイベント、ＳＮＳでの魅力発信

【原則３】「ベース」基盤

小さな「困った」を見逃さず、無理なく支える仕組みをつくる

～「安心」と「継続」の土台～

どんなに立派な活動も、土台（ベース）がしっかりしていなければ崩れてしまいます。「安心」と「継続」の両面から足元を固めます。

- お互い様のセーフティネット
  顔の見える関係があるからこそ、小さなＳＯＳをキャッチできます。制度の隙間を地域のおせっかいで埋めていきます。
- 無理なく続けられる運営体制
  ＩＣＴ活用による負担軽減や、財源の確保など、無理なくぼちぼち長く続けられる「仕組み」に整えます。

＜活動例＞

なんでも相談（名称工夫）、見守り・訪問、有償ボランティア制度、自主財源確保、ＩＣＴ活用等、ぼちぼちやっちみろかい（マインド）

5 実現のための４つの創造

①組織体制：「固定化」から「チーム戦」へ

・人脈を活かし、幅広い人に声掛けしながら年齢層の厚い組織体制化
・地区社協担当者の増員
・学校関係者の役員・理事参入
・関係機関とつながりのある地域
・専用事務室の確保
・有給職員の雇用
・法人格の取得（NPO 法人、一般社団法人等）
・策定委員会のメンバーを構成メンバーとして位置づけ
・有償ボランティアの拡大
・地元企業の参画
・動きやすいポストづくり

②財源：「依存」から「稼ぐ力・応援される力」へ

・法人サポーターの募集
・協賛企業（スポンサー）の発掘
・自主財源確保のためのツール開発
・社協のファンを増やして財源確保
・サロン等のイベント参加費
・地区社協の宝くじ（抽選方式の協賛）
・人材を活かした収益事業（演奏、手品）
・物品販売
・場所、物の貸し出し
・有償サービスの導入
・忌明け寄付の活用

③事務局機能：「事務処理」から「つなぎ役」へ

・事務局員の配置
・相談窓口の多機能化（専門相談会、サロン実施）
・週５日開設
・地区社協にボランティアコーディネーターの配置
・地区担当２人体制
・ICT の活用（報告書類の簡略化、デジタル化）
・いろいろな事業を企業とコラボ

④拠点：「会議室」から「あたたかい居場所」へ

・専用机を地区公民館内に配置する
・子どもの居場所の開設
・空き家・空き教室を活用した居場所づくり
・１地区に複数（２つ以上）の拠点化
・小学校区でのミニサテライト
・なんでも相談室を雑談室に

＜平成と令和の比較＞

	平成 11 年版（創設期）	令和版（転換・発展期）
①モチベーション	「義務・役割」「～せねばならない」という責任感	「楽しさ・共感」「ワクワク」「会いたい」という感情
②組織のあり方	「代表者連合体」（ピラミッド）	「チーム戦・プロジェクト型」（フラット）
③アプローチ	「計画から活動へ」	「まずはやってみる」「走りながら考える」
④対象・相談	「高齢者中心・待ちの相談」	「全世代・出向く支援」

6 活動ヒント集・アイデア集

実践！　今日からできる！　活動ヒント集・アイデア集

「じゃあ具体的に何をすれば？」に答える具体的なアイデア集

ヒント①　名称を変えてみよう：

「相談所」→「お茶の間」、「会議」→「作戦タイム」

「困った人は来てください」と待つのではなく、「健康チェックにおいで」「お茶を飲もう」と誘い出し、雑談の中で困りごとをキャッチします。

例）「地区の保健室」として、お茶飲み会感覚で相談できる場を設置
「なんでも相談」を「なんでも語り場」へ名称変更

ヒント②　デジタルを使ってみよう：

回覧板を LINE に、安否確認をビデオ通話で

役員間の連絡を LINE グループにするだけで、連絡網の手間が軽減されます。また、スマホ教室を開けば、高齢者のデジタル活用が進み、見守りも楽になります。

例）LINE 相談窓口の新設。
二次元バーコードを掲載し、デジタルと連動

ヒント③　若者を巻き込もう：

「手伝って」ではなく「教えて（スマホなど）」と頼る。

チラシのデザイン、SNS 発信、イベントの企画など、若者の得意分野で「運営」に関わってもらいます。

例）中高生・大学生による SNS 発信チームやショートムービー制作
中学生ボランティアに「昔遊び」の企画を依頼

ヒント④　「ぼちぼち」で行こう：

やめる勇気、休む勇気も大切。

「毎年やっているから」という理由だけで続けている行事は、思い切って休止したり、他の行事と合体させたりして、負担を減らしましょう。

例）既存の行事（祭り）の中で、防災の炊き出しを一緒に行う
相談員の輪番制や複数人対応で負担軽減。

ヒント⑤　「防災」を楽しむイベントにしよう

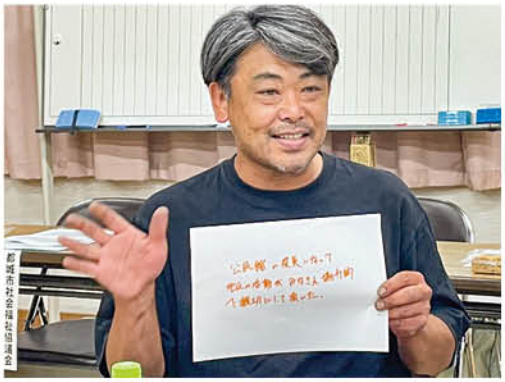
楽しみながら助け合いの関係づくり

「防災訓練」だと堅苦しいですが、「防災キャンプ」「非常食ピクニック」なら子どもも参加したくなります。楽しみながら、いざという時の顔の見える関係を作ります。

例）防災キャンプ、BBQ などを通じた学びの場
地区の六月灯と一緒に炊き出し訓練を行う

Most Significant Change（MSC）≒「最もすごいチェンジ」

地域の「良さ」や「長所」から、地域福祉にとっての価値や大切なことを共有するために、活動の中でよかったことの変化のエピソードをそれぞれの立場で１つ考え、エピソードを一人ひとり発表し合いました。



こけない体操で高齢者と交流ができたこと

自治公民館の役員になったら、地域の活動に皆さん協力的で親切にしていただいた

地域に若い人（家族）が増えてきた

ほかにもこんな素敵なエピソードがありました！

- 学校に登校できていなかった子が登校できるようになり、当たり前に学校生活を過ごせるようになったこと
- 「毎日見かけていた高齢者を見かけなくなった」と、名前も知らない住民を心配した相談が寄せられるようになった
- 共同墓地の清掃にあらゆる世代の皆さんが集まってくださるようになった‼
- 水流神社六月灯棒踊り復活（昨年少子化で中止、今年復活）危機を感じて希望したのは子どもたち自身！
- 寺子屋サロンに参加していた６年生が来年は中学生ボランティアで参加したいと言ってくれた
- コロナでできなかった施設の祭りを３年ぶりに実施し、地域の協力や施設内外の出し物で、笑顔、涙、様々な反応があった

7 １０年後の未来図（ビジョンストーリー）

“ぼちぼち”でも“きらり”と光る地域であるために
「楽しくなければ、地域じゃない。未来を綾なす一歩をここから。」

「令和版地区社協構想策定プロジェクト」（令和６年度当時）

■Aチームメンバー

No.	氏　名	所属・役職名
1	石田　　操	都城市地区社会福祉協議会連絡協議会 会長（高城地区会長）
2	桑山　英久	都城市地区社会福祉協議会連絡協議会 副会長（祝吉地区会長）
3	石井　澄子	都城市地区社会福祉協議会連絡協議会 事務局長（五十市地区事務局長）
4	永山かゆみ	中郷地区社会福祉協議会 事務局長
5	川﨑　　弘	都城市社会福祉施設等連絡会 事務局長（恵愛会在宅副施設長）
6	三角　太作	森山内科・脳神経外科　事務局員
7	大塚　浩史	住友ゴム工業株式会社　宮崎工場　総務課
8	満園真由美	都城市社会福祉普及推進校連絡会 会長（高崎小学校長）
9	高橋　正彦	都城市志和池・庄内・西岳地区地域包括支援センター管理者
10	冨吉　賢司	都城市福祉課 主幹
11	朝倉　伸一	都城市生涯学習課 副課長
12	幣次　加奈	都城市地域振興課 副主幹

■助言者

1	清水　潤子	武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科　助教
2	永田　　祐	同志社大学 社会学部 教授

※その他、Ｂチームとして職員が参画

新「地区社協」創造

～笑顔でつながり、未来を綾なす新しい地域～

発行：都城市社会福祉協議会
策定：令和８年３月